

説 教

聖日礼拝 北浜チャーチ
黒田 禎一郎

2017年8月27日（日）

主 題：「喜び、感謝、賛美がわく人生」

一神の恵みに生きる一

テキスト：ヘブル人への手紙10章1～10節

はじめに

1) 先日、私は「失敗は予測できる」（中尾政之著、光文社新書313）という本を、もう一度目を通しました。というのは、最近とてもミスが多いからです。人間は生きている限り、自分の周りには失敗がツキモノです。

皆さんは、いかがでしょうか。自分は“失敗はない！”と断言できるでしょうか。

- ・一口に失敗と言っても、多くの方が命を落とす大事故に至る失敗から、自分が寝坊して入学試験、入社試験に間に合わなかった日常的な失敗まであります。挙げれば切りがありません。そういう私も、私なりに失敗が多くあります。
- ・この本の著者は、数多くの失敗例を挙げて、その教訓を整理しました。たとえば、タイタニック号の沈没、チェルノブリ原子力発電所の爆発、アメリカ9・11事件などの歴史的事故・事件から、国内で相次いでいる企業の不祥事に至るまでを徹底的に精査しました。そして、それらの失敗を分類していくと、なんと41のパターンに集約できることを示しました。失敗は「繰り返す」と言います。そこで著者は、ミスを繰り返さないために対策方法についても記しています。その詳細については、各自で本を読んでいただきたいと思います。一読に価する価値がある本です。

2) 話は変わりますが、「歴史は繰り返す」とよく言われます。失敗は繰り返します。イスラエルの民の失敗を見ると、確かにそうであると思います。イエス・キリストが来られ、十字架、復活を通して、神の救いのわざが完了しました。そしてキリスト教会が生まれました。キリストを頭とする教会は、現在に至るまで続いています。しかし、約2000年にわたり、失敗を繰り返してきました。私たちは歴史を通して、学んだはずでしたが、失敗を繰り返してきました。

【例 話】

- ・私はかつて、ドイツのトリエル(Trier) 大学で学びましたが、その町は美しいモーゼル川に沿うドイツ最古の町です(BC15年にできた)。ですから、ローマ時代の遺跡があり、今なお当時のコインなどが出てきています。当時は人口約10万人で、多くの人々に知られた町です。町全体がカトリック教で、プロテスタント教会は当時、一つでした。
- ・このトリエルは、共産主義思想(イデオロギー)を生んだカール・マルクス(Karl Marx)の生家があります。両親はユダヤ人でした。彼はそこでカトリック教会の姿を見ました。モーゼルワインで有名なブドウ畑で働く貧しい農民の血税が、教会税として使われ、教会は非常に富むものとなりました。少年時代に社会の矛盾を見た彼は、その後残念なことに無神論思想を訴えるリーダーとなりました。カトリック教会の霊性の墮落は、ドイツばかりではありません。ヨーロッパ各地に広まっていきました。

3) そのようなキリスト教史で、17世紀に入ると、英国では清教徒(ピューリタン)による信仰復興運動(Rivival Movement)が始まりました。その背景には英国の長い歴

史の中で、キリスト教会は国の宗教となり、大切な礼拝が次第に伝統化し、習慣化していきました。教会堂という建物（形）はあります。しかし、そこに大切ないのちが失われてきました。

- そこで、ピューリタン指導者ジョン・オーエン（John Owen）師が、神によって信仰復興に立ち上がりました。中途半端な信仰改革ではなく、真の信仰に戻るよう訴えました。清教徒たちはメイフラワー号に乗り、新天新地を求めてアメリカ大陸へ渡りました。それが清教徒革命でした。そして、彼らによってアメリカ合衆国の歴史が始まりました。
- そのジョン・オーエン師が最も愛した書簡が、このヘブル人への手紙であったと言われます。彼はみ言葉に基づいて、聖書を忠実に講解した人でした。神の御言葉に立った他の宗教改革者たちも、同じようにこの手紙を愛読し、深く学びました。それは、もはや儀式を中心とした旧約時代の礼拝に帰ってはいけないことを、確信するためでありました。歴史を繰り返さないためでした。
- では、なぜ旧約聖書時代の礼拝に帰ってはいけないのでしょうか。
今日のテキストは、その大切なポイントを教えてください。 2点

大切なポイント

1 旧約聖書時代の礼拝

1) 伝統、習慣化した礼拝

- 皆さん。伝統化、習慣化した英国をはじめとするヨーロッパのキリスト教会は、旧約聖書時代のような動物の犠牲による礼拝がなされていたわけではありません。彼らの礼拝は、長い時間の経過の中で、しだいにイエス・キリストが中心の礼拝ではなくなりました。キリスト中心の礼拝でなければ、旧約時代の礼拝と変わらないことを、この手紙は教えています。
- **10:1 律法には、後に来るすばらしいものの影はあっても、その実物はないのですから、律法は、年ごとに絶えずささげられる同じいけにえによって神に近づいて来る人々を、完全にすることができないのです。**
- 旧約聖書時代、人々は具体的に捧げ物をささげた礼拝をしていました。しかし、そのような礼拝形式が習慣化してくると、人々の罪意識、罪の赦しが次第に薄らいできました。そういう礼拝が繰り返され、形式的には罪が動物に転嫁されて、取り除けられました。しかし、実質的には何ら変化はなく、罪意識はそのまま残り続けました。旧約聖書時代の礼拝は、そういうものでした。
- そういう礼拝は、キリストによる本物の礼拝を指し示す実物教育としての役割しか果たしませんでした。しかし、そういう礼拝では駄目であると言いました。なぜなら、今やキリスト・イエスがこの世に来られ、永遠の贖いを十字架上で成し遂げてくださったからです。

2) きよめられない良心

- 旧約聖書時代のいけにえは、罪を取り除くことができなかつただけではありません。彼らはいけにえを捧げること、それなりに罪を強く自覚したことでしょう。しかし、良心の呵責は取り除けませんでした。伝統、習慣化した信仰には命が失われていく危険性があります。
- 多くの宗教は、それを繰り返しています。罪が赦され、過去を清算したいと願っても、きよめられない良心があります。そこで人は修行を積み、人間的努力によって、罪の赦しを得たいと願っています。

- 旧約聖書は「人はどのように生きるべきか」を事細かに記しています。その中心的な考えは、レビ記にあります。
19:2 「イスラエル人の全会衆に告げて言え。あなたがたの神、主であるわたしが聖であるから、あなたがたも聖なる者とならなければならない。
- この神のみ言葉があるために、モーセはじめイスラエルの人たちは「聖なる者（罪なき者）」となるために、あらゆる努力をしてきました。しかし、聖なる者とはなれませんでした。
- クリスチャンの中にも、同じような経験をしている人がいます。確かに罪の告白はしますが、告白を終えても惨めな思いは消えないのです。初代教会時代、多くの働きをしたパウロは言いました。ローマ7章
7:18 私は、私のうち、すなわち、私の肉のうちに善が住んでいないのを知っています。私には善をしたいという願いがいつもあるのに、それを実行することがないからです。
7:19 私は、自分でしたいと思う善を行なわないで、かえって、したくない悪を行なっています。
7:20 もし私が自分でしたくないことをしているのであれば、それを行なっているのは、もはや私ではなくて、私のうちに住む罪です。
7:21 そういうわけで、私は、善をしたいと願っているのですが、その私に悪が宿っているという原理を見いだすのです。
7:22 すなわち、私は、内なる人としては、神の律法を喜んでいのに、
7:23 私のからだの中には異なった律法があって、それが私の心の律法に対して戦いをいどみ、私を、からだの中にある罪の律法のとりこにしているのを見いだすのです。
7:24 私は、ほんとうにみじめな人間です。だれがこの死の、からだから、私を救い出してくれるのでしょうか。
7:25 私たちの主イエス・キリストのゆえに、ただ神に感謝します。ですから、この私は、心では神の律法に仕え、肉では罪の律法に仕えているのです。
- パウロはこの告白が自分のものとなった時、初めて心の目が開かれました。そしてキリストの十字架を感謝の涙を持って仰ぐ人になりました。神からの赦しを本当に経験した人は、惨めな思いではなく、喜び、感謝、賛美に満たされます。きよめられない良心が、神の恵みによってきよめられたからです。

2 新約聖書時代の礼拝

1) 受肉の意義

- キリストが天からこの世に来られた時、肉体を取られたのは、その肉体を十字架上で犠牲にするためでした。動物の犠牲は実質的に何の効力もなかったのを、永遠の神の御子が肉体を取り、人間となられて、十字架上でその肉体を犠牲としてささげられたことによって、永遠の償いをしてくださったのです。
- そのことを、著者は旧約聖書の詩篇 40 篇が主イエスご自身のことを述べているということをも前提として、主イエスの言葉を引用しております。

10:5 ですから、キリストは、この世界に来て、こう言われるのです。「あなたは、い

けにえやささげ物を望まないで、わたしのために、からだを造ってくださいました。

10:6 あなたは全焼のいけにえと罪のためのいけにえとで満足されませんでした。

10:7 そこでわたしは言いました。『さあ、わたしは来ました。聖書のある巻に、わたしについてしるされているとおりに、神よ、あなたのみこころを行なうために。』」

- ・イエスはルカ福音書で、ご自身のことを次のように言われました。
24:44 わたしについてモーセの律法と預言者と詩篇とに書いてあることは、必ず全部成就するということでした。」
- ・つまり、ここで言われていることは、旧約聖書と新約聖書は、一貫した神の大きなご計画の中にあるということです。
- ・皆さん。誤解しないでください。旧約聖書時代、いけにえを決して軽視しているわけではありません。いけには自分にとって価値のあるものを神に捧げるわけですから、神への愛と献身によって神に近づくことを意味しているからです。
- ・ところが、いつのまにか、いけにえを捧げているから神に近づけると思い、手段が目的と化してしまいました。ここに人間が持つ弱さがあります。私たちも同じです。教会に来ているから大丈夫、奉仕をしているから大丈夫、お祈りしているから大丈夫というではありません。信仰とは、イエス・キリストの十字架のみわざを信じ、そして受け入れることから始まります。そしてイエスを経験することです。

2) 真のいけにえ

- ・サムエルは次のように言いました。1サムエル記
15:22 するとサムエルは言った。「主は主の御声に聞き従うことほどに、全焼のいけにえや、その他のいけにえを喜ばれるだろうか。見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。」
- ・ダビデは次のように言いました。詩篇 51:16-17
51:16 たとい私がささげても、まことに、あなたはいけにえを喜ばれません。全焼のいけにえを、望まれません。
51:17 神へのいけにえは、砕かれたたましい。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません。
- ・これら2人の偉大な神の人は、紀元前の人たちでした。それはメシア（イエス・キリスト）が到来する前でした。しかし彼らは神のお心を、正確に言い表しました。すなわち、前にも語りましたように、旧約聖書時代の人々はメシアであるキリストを前において歩みました。新約聖書時代の私たちは、メシアであるキリストを後ろにおいて歩んでいます。いずれもキリスト・イエスが中心です。
- ・皆さん。イエス・キリストの地上生活を見ると、父である神への完全な服従でした。神の御子の権威を持っておられながら、それをご自分の軌跡のわざとしては用いられませんでした。すべて父なる神の御心に従い、神の御子としての権威を行使されました。その中の最大のものが、十字架の上での死でした。
- ・みことばは次のように語っています。
10:10 このみこころに従って、イエス・キリストのからだは、ただ一度だけささげられたことにより、私たちは聖なるものとされているのです。
そうです。イエス・キリストが一度だけささげられたことによって、神を信じる者は「聖」とされるのです。何という幸いではありませんか。

- ・皆さん。ユダヤ教徒たちは神の前に「聖なる者」となろうと、必死に生きてきました。しかし人間の行為、すなわち動物の犠牲をささげること、数々の宗教儀式も、修行に励むことも、「聖なる者」となるためには、とうてい及ばないことでした。人にできないことを、神はキリスト・イエスによって成就してくださいました。それは神からの贈物です。
- ・神は、なぜ、それほどまでの贈物を与えてくださったのでしょうか。
⇒神の片務契約によります。神のアガペー愛です。
私たちはどこまで行っても、このキリストの愛によって「神との契約」に与った人は、その恵みから決してもれることはありません。なんという幸いではありませんか。神のその愛の契約にある人に、「喜び、感謝、賛美」がわく人生が始まります。
- ・聖書は「今は恵みの時」と語っています。旧約聖書時代のような生きた方は、不要であるからです。確かに「恵みの時」です。私たちはこの大きな贈物をどのように受け止めているのでしょうか。子どものように、素直な心で受け止めようではありませんか。

ま と め

主 題：「喜び、感謝、賛美がわく人生」

ー神の恵みに生きるー

10:10 このみこころに従って、イエス・キリストのからだを、ただ一度だけささげられたことにより、私たちは聖なるものとされているのです。

- ・今日、神は「恵みの時」に生きる者は、どんなに幸いな立場におかれているかをお語りくださいました。次の2点にまとめてみたいと思います。
 1. 神のお心にかなう、真のいけにえが捧げられた
 2. 聖徒には、恵みの内に生きる特権が与えられた

* God bless you !